ジャンル：民話

お姫様松（おひめさままつ）

むかし、むかしの話です。それも約三百年ものむかしのことです。引野の明栄寺のはなれ屋に、毛利元就の孫にあたる古満姫様（こまひめさま）がひっそりとすんでおられたそうです。

このお姫様は、毛利家の一番家老宍戸（ししど）というとてもよい家柄のうちに生まれられたのですが、大変ふしあわせな方でした。

十八歳の時に、小早川秀秋（こばやかわひであき）という殿様の家にお嫁にいかれたのですが、夫である秀秋様が朝鮮征伐の大将として活躍され、帰られると、まもなく二十歳という若さでなくなられたのです。

そこでしかたなく、古満姫様は、宍戸家へお帰りになりました。そしてふたたび、京都の興正寺（こうしょうじ）の門跡、準尊（じゅんそん）様のところへお嫁にいかれたのです。

ところが、お嫁にいかれるとき、毛利輝元公（古満姫のいとこ）が、あわれに思われ、化粧料（今の持参金）として明栄寺のある引野の地をあげられたのです。

さて、ふたたびお嫁にいかれた古満姫様は、お寺にいかれて三人の男の子と、二人の女の子に恵まれ、立派に一人前に育て上げられました。ところがまた、不思議なことに、二度目の夫である準尊様がなくなられたのです。その上お子様の中のお一人である二男の準円様は、体が弱く、京都から遠い周防の萩の清光寺の住職になっておられました。

古満姫様は、この準円様のことを大変気にかけておられました。

年をとられた古満姫様は、京都の町から引野の地　明栄寺の一室にうつられ、静かないんきょ生活をしておられました。しかし、こころはいつも萩におられる準円様のことが気になり、夜もやすやすねむることができなかったそうです。

ある日　萩の準円様は、お母さんの夢をみられました。そこで、さっそく引野にこられたところ、それより準円様は病気になられ、ねたきりになられました。お母さんの古満姫様は、わが子をどうかしてよくしてやろうと、夜も昼もねないで看病されたのですが、とうとう十五日目に、寺の一室で準円様はなくなられたのです。古満姫のなげきようときたらたとえようがありませんでした。

古満姫様は悲しさのあまり、明栄寺のすく東の小高い墓地に準円様ののお墓を建てられました。そして、そのそばに自らの手で一本の松の木を植えられたのです。毎日毎日、命終わるまでお参りされたそうです。

そのお手植えの松は不思議にも、準円様の墓を抱くようにとりまき、いかにも我が子に乳をのませるように根っこがとりまきました。近くの人は、その後、その松のことを『おちち松』とも『古満姫様』とも呼び、今なお、お母さんの限りない愛情をたたえています。

出典　「阿知須ふるさと今昔　民話編」
平成十一年二月　発行
阿知須町教育委員会　発行・編集